

東京日々新聞

九百十四号



彼の先達を
 任事と休は俄に中五六人と誘ひ彼病
 人の許に至り是の漢摩と云ふ病の批上中盛人
 大と被さ鈴よりな珠教筋の病と持異口同音真言と
 つ病人の頭より手足に三ツまで汗と嫌ひ打ち叫け病人の苦痛
 は絶へざるは應隆の真似して時の苦と連れ思ひ速立
 ち去り云と云先達目と怒り出て行くと証據と立
 ず其証據は何と云と押 誦られ病人
 當惑せし亦の三本直で形も似といひ久昔一同一立
 るを病床の辺を探求むと更なるけさ先達又
 怒りて最一此養生此上ハ一鉄持掛兵と
 いふと胸つり病人いりて起直りコリ左官
 庄太郎の氣と落つてと聞れよ世が
 軀と口を病と病氣を付て居るは
 外も何も付て居ぬが病と病と病と病
 は燃れて居るは多かる甘ア此二も益
 一の中馬車と真似と云と云と神
 本川縣議(頼以付る)と目と怒りして
 台限つられ先達の肝と演し手持り沙汰
 る類と云と講中の中も云と
 滄げ帰れし不動
 馬車は一
 一



横濱元町の商某の梅毒を煩ふ事
 既に十三年の久しき
 及び此の梅毒の
 強さ故に只試みる
 き諸醫と云ふ事
 折とありかゝる家内
 の事も聞つて是の
 全人
 應物
 のまらる
 らん吉田
 町に任
 める大講
 とう御敷
 齋との先
 達の所(監
 行其次第
 と云て
 頼
 一

